



静岡大学
地域創造学環
SCHOOL OF REGIONAL DEVELOPMENT

—平成29年度—
フィールドワーク
報告書

大学を飛び出し、地域の皆様と連携し
学んできた成果を報告いたします。

文部科学省
地(知)の拠点



第2回地域創造学環フィールドワーク報告会にあたって

今年も、昨年に引き続き、皆さまに対して地域創造学環の学生が実施したフィールドワークについて報告させていただくことになりました。昨年度後期からは新1年生が加わり、2学年の学生が共同してフィールドワークに取り組みました。また、フィールドの入れ替わりもあり、静岡県内13箇所、15のテーマでフィールドワークを行っています。それぞれのフィールドでは、行政はじめ地域の皆さまに大変お世話になりました。深く御礼申し上げます。

学生たちを見ていると、初年度は言われたことをこなすだけで精一杯という印象がありました。しかし、経験を積むにつれて、積極的に質問したり、意見を述べたり、改善案などを提案したりできるようになっています。また活動の中での気づきも深くなっているように思えます。少しずつですが、着実に成長していると実感させられています。私たちも、焦らずに、学生たちが自ら一歩ずつ前に進んでいくのをサポートしていこうと思います。

ここに、この1年間学生たちがどのような活動を行い、何を見出したのか、また今年度に向けてどのようなことを行おうと考えているのか、報告させていただきます。まだまだ拙いところも目につくかと思えます。皆さまから忌憚のないご意見、アドバイスをいただければと思います。それを糧にして、学生たちは、今年度も同じフィールドでフィールドワークを継続していきます。そして、秋からは新1年生も加わり、3学年合同での取り組みが始まります。皆さまにおかれましても、引き続き学生たちの歩みを温かく見守りつつ、ご支援くださいますよう、心からお願い申し上げます。

なお、学環のホームページ上 (<http://www.srd.shizuoka.ac.jp/>) でフィールドワークの様子を公開しており、順次更新していく予定です。こちらもご覧いただければ幸いです。

平成30年5月31日

国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
平岡 義和

目 次

| | |
|-----------------------------------|-----------|
| 地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み | 2 |
| 地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ | 3 |
| 平成29年度フィールドワーク報告 | |
| 静岡市 清水港周辺地域 | 4 |
| 静岡市 庵原地区 | 6 |
| 静岡市 東静岡駅前 | 8 |
| 静岡市 駒形通四丁目商店街 | 10 |
| 静岡市 浅間通り商店街 | 12 |
| 焼津市 浜通り | 14 |
| 浜松市 浜松文芸館（公益財団法人 浜松市文化振興財団） | 16 |
| 浜松市 佐久間町 | 18 |
| 田園空間博物館 とうもんの里 | 20 |
| 松崎町 商店街 | 22 |
| 松崎町 観光と防災 | 24 |
| 東伊豆町 | 26 |
| 伊豆半島ジオパーク（環境） | 28 |
| 伊豆半島ジオパーク（教育） | 30 |
| 県営団地 | 32 |
| 新聞に見る地域創造学環フィールドワーク | 34 |

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、平成28年4月にスタートした従来の学部の枠組みを越えた新しい全学学士課程横断型教育プログラムです。静岡大学のすべての学部（人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部）の授業を履修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域（フィールド）に飛び出し、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。



フィールドワークの取り組み

現在15テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

地域創造学環のフィールドワークの特徴

- ① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
- ② 5コースを融合したチームを編成し、異分野が結束して取り組む
- ③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
- ④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

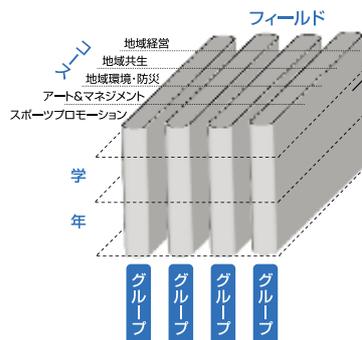
フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわたり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組めます。



コース融合のチーム編成

コース、入学年という枠にこだわらないグループ編成でフィールドワークを行っています。



静岡市

清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加



東静岡駅前

アートとスポーツによるにぎわい創出



浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出



庵原地区

庵原地区の地域資源を活かしたスポーツと食による「健康長寿のまちづくり」



駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街のにぎわい創出



焼津市

焼津市浜通り

浜通りの人や歴史・文化を活かし、多様な交流を育む服部家を考える



静岡県内各地

県営団地

県営住宅団地における居場所づくりと地域福祉資源のネットワーキング



伊豆半島ジオパーク(環境)

伊豆半島ジオパーク資源の環境モニタリングと保全方策



伊豆半島ジオパーク(教育)

ジオパークガイドと連携して開発する伊豆半島ジオパーク教育プログラム



東伊豆町

東伊豆町の新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト



浜松市

浜松文芸館

公益財団法人 浜松市文化振興財団

若者の文芸離れを食い止めよう



佐久間町

中山間地域の地域再生実践



掛川市

田園空間博物館 とうもの里



「田園空間博物館とうもの里」の産地直売運営と交流人口拡大

松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出



松崎町 観光と防災

防災と観光の両立



静岡市 清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加

メンバー ※学年は平成29年度
(地域経営) 2年 影山舞、本田圭美、1年 小坂優果
(地域共生) 2年 杉山莉奈
(地域環境・防災) 2年 梅田和典
(アート&マネジメント) 1年 樋口加奈
(スポーツプロモーション) 2年 岩崎彩音、坂井宏輔、藤川智奈美
1年 野村圭生、溝上敬佑
指導教員：○准教授 石川宏之、教授 岩田孝仁 ※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡市清水区地域総務課
清水地区連合自治会
浜田地区連合自治会

地域の概要

清水港周辺には港に近く新鮮な魚が魅力の清水魚市場「河岸の市」があり、休日多くの人が訪れる。他にも、文化芸術などの催事に対応できる多目的施設「静岡市清水文化会館マリナート」、港に隣接した複合商業施設「エスパルスドリームプラザ」、清水港の歴史を学べる「フェルケール博物館」等、数多くの魅力的な資源が存在する地域である。

また、地元商店街の中に、清水港の立役者として今も愛される清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」などの観光名所が点在している。さらに、美しい富士山が観望でき、新鮮な魚が捕れる清水港に外国客船の寄港が増加しており、外国人観光客が多く訪れるようになった。しかし、清水区の人口は少しずつ減少しつつある。

発見した地域の課題

①清水港線跡自転車歩行者道

平成28年度のフィールドワークにて、清水港線跡自転車歩行者道の活用方法についてのワークショップへ参加した。そこで説明を受けたとおり、徐々に整備が進められている。もともと問題となっていた暗さや危険度などは、それらにより少しずつ変わっているが、まだまだ改善が必要だろう。

②外国人観光客の増加に対する対応

近年、清水港には多くの客船が寄港するようになったが、外国語が話せるスタッフや外国語表記の看板の設置などがまだ間に合っていない。そのため、アジアの観光客とは、文化の違いからマナーの問題などが起こりやすく、実際それに対して不満を持っている声を多く聴いた。また、増え続けている欧米からの観光客は日本の文化を知りたいという思いが強いため、観光客用に街を歩きやすくする工夫が必要だろう。

③商店街の衰退

今年度のフィールドワークでは、次郎長通り商店街、清水港町商店街（エスパルス通り商店街）及び清水銀座商店街に関わる機会があった。やはり商店街ということもあり、近年話題にあがっているように衰退している様子が見られた。利用者、とくに若者が減少していることが課題の一つといえるだろう。

今年度取り組んだことと成果

①清水港線跡自転車歩行者道関連イベントの実施

「静岡市こどもクリエイティブタウンま・あ・る」で、講座『ハロウィン特別企画★お菓子&仮装グッズをつくろう』を開催し、清水港線跡自転車歩行者道関連イベントに繋げる企画の考案と講師を務めた。また、このイベントで作製した仮装グッズを清水港線跡自転車歩行者道で行われるハロウィンイベントで活用できるようにした。清水銀座商店街も同じくハロウィンのイベントが開催されると聞き、連携してイベントを進めていった。ハロウィンイベント当日は台風のため会場を屋内へ変更して実施した。そのため参加者は予想をはるかに下回ってしまい、予定していた企画をいくつか中止したが、役所の方々、自治体と協力して無事やり遂げることができた。



ハロウィンイベント@清水区役所

②外国人旅行客用ポップ（まち紹介パネル）の作成

1年生と2年生でエリアを分け、商店街の聞き取り調査を行った。聞き取り調査の内容は、商店街の方々が、まち紹介パネルに載せたい内容やパネルの大きさなどである。アジア圏の外国人旅行客も増加しているため、英語と中国語の二カ国語を表記した。最終的に、これらをもとに外国人旅行客用ポップを作製し、商店街等に配付した。



学生が作製した翻訳パネル

③情報発信ツール

「外国客船寄港時用まち歩きマップ」のコンテンツを抽出した。7月中旬に地元の自治会、静岡市国際交流協会の方々と一緒に浜田地区と清水地区のまち歩きを行い、8月中旬にまち歩きの際に発見した地域の魅力について各自意見を出し合った。マップは、清水区役所で作成された。

今後取り組むべきこと

- 昨年度の清水港線跡自転車歩行者道関連イベントの反省を活かし、今年度は、イベント開催の告知を多くの方に伝えられるようにしたい。イベント、ワークショップに来てくれた方たちのアンケートでは、またやって欲しい等の嬉しい意見が多かったので毎年続けていければと思う。
- 外国人観光客の増加に関しては、外国語の表記を充実させる。例えば、私たちのフィールドワークでは、外国語表記による注意喚起や店舗紹介の案内パネルを作製したが、そのような表示をもっと多くの店舗等に設置する。
- 商店街の衰退に関しては、昨年度あまり携わることができなかったため、商店街の各店舗が協同でイベント等を行い、それによって地域の若者と親睦を深めたり、各店舗の商品を知ってもらったりすることが必要である。例えば飲食店であれば試飲・試食会を開くなどが考えられる。

参考：1年目のフィールドワークのまとめ

●昨年度取り組んだこと

- ① 清水区の商店街、市街地のまち歩き
- ② 清水港線跡自転車歩行者道の活用に関するワークショップへの参加
- ③ 外国人観光客向けPR映像のコンテンツ案を提案

●発見した地域の課題

- 清水駅前銀座商店街
 - ① 少子高齢化による店舗の存続
 - ② 利用者の減少と若者離れ
 - ③ 情報発信力の低さ
- 清水港周辺地域
 - ① 外国人観光客への対応
 - ② 清水港線跡自転車歩行者道の活用方法

●2年目以降に取り組むべきこととして考えていたこと

- まずは伝統ある「七夕祭り」を盛り上げる。
- 商店街振興組合の方々ともう一度話し合う場を設ける。
- 外国人向けのポップやパンフレットを作る。
- 地元の方々と協力する。
- もう一度利用方法について話し合う。
- イベントを開く。(ハロウィンのカボチャ作りワークショップなど)

静岡市 庵原地区

地域資源を活かしたスポーツと食による「健康長寿のまちづくり」

メンバー ※学年は平成29年度
(地域経営) 2年 和泉直人
(アート&マネジメント) 1年 矢勢才華
(スポーツプロモーション) 2年 加藤鉄平、岸野泰知、水野大貴
1年 大城ひいろ、山下宇光、山梨空良
指導教員：○講師 村田真一、教授 水谷洋一、准教授 杉山卓也
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡市清水区地域総務課
庵原地区連合自治会
公益財団法人静岡市まちづくり公社

地域概要



↑コース途中のビューポイントからの眺め

場所は静岡県中部、静岡市清水北部の庵原山地にあり、人口約1万人、総世帯数約2700世帯である。特産物は主にお茶とみかんであり、庵原地区には多くのみかん畑と茶畑が広がっている。また、清水ナショナルトレーニングセンター「J-STEP」や清水庵原球場などスポーツ施設が充実している。今年も、プロサッカーチームであるヴァンフォーレ甲府がトレーニングキャンプ地として清水ナショナルトレーニングセンターを利用した。このように庵原という地域は“食”と“スポーツ”が主なウリである。

庵原地区にあるものを活かした健康長寿のまちづくりを目指し、これまで健康づくりのイベントを開催してきた。人口減少が課題であるが、地域の取り組みには地域住民自らが積極的に参加し、助け合い、心温まる生き生きとした地域である。

取り組んだこと&成果

昨年は、庵原地区の魅力探求を主な活動として行った。それを基に、今年はその魅力発信をテーマとして取り組んできた。具体的な活動としては、「庵原deリフレッシュ day♪」というノルディックウォーキングとマルシェのイベントの企画・運営をスポーツ班と食班に分かれ、並行して行った。

内容としては、スポーツ班は健康長寿をアピールするために、健康志向型スポーツであるノルディックウォーキングのイベント開催を行い、食班は庵原地区の特産物であるお茶やみかんを活かした新たな商品を考案し、イベント内にて試食品の提供により食資源の発表を行った。



↑ノルディックウォーキング受付前の様子

イベント開催に向けた準備段階

- スポーツ班 → ・ノルディックウォーキングのコース設定
・ノルディックウォーキング前後の準備運動やストレッチの考案
- 食班 → ・スイーツの考案
・庵原地区の天然酵母パンの店シュクールさんと連携し、試作品を作成

イベント当日

- スポーツ班 → ・ノルディックウォーキングイベントの運営
- 食班 → ・完成したスイーツの試食提供

成果

- スポーツ班 → ・イベント参加者合計259人 ⇒ スポーツで地域を盛り上げることができた
- 食班 → ・試食品として用意していた約400食を全て配布
・商品として販売した庵原焼約30食の完売 ⇒ 庵原の食資源の発信ができた
・考案した「庵原グロフ」が天然酵母パンの店シュクールさんにて商品化へ



←スイーツの試食提供

地域課題

庵原地区だけではないが、静岡市全体で人口流出、高齢化が問題になっている。この問題を解決するために、魅力あるまちづくり、アクティブな高齢者を増やすためのいきがづくりが必要である。庵原地区には、多種多様なスポーツで利用される清水ナショナルトレーニングセンター「J-STEP」や清水庵原球場がある。これらの施設は、学生、Jリーグのトレーニングキャンプやプロ野球選手の自主トレで活用されているが、一般客の利用頻度をより高めていく必要がある。また、お茶やみかんを中心に多彩な農産物が栽培される農業地帯でもあるがそれらを活用した名物の更なる創出も必要である。このように庵原地区は地域資源を有しているにも関わらず、それらを地域活性化のために最大限活用できていない。また、それら資源の情報発信のあり方を考える必要がある。



↑清水ナショナルトレーニングセンター「J-STEP」

スポーツ&食の持続可能性

スポーツ分野

まずは地域住民のスポーツライフを豊かに！

- ノルディックウォーキングの日常への導入
 - イベントを通して多くの人に良さを知ってもらう。
 - 同時に、庵原地区がスポーツライフに適しているということもPRする。
- 健康に対する意識が高い住民が多い
 - その他の種目にも需要があるのでは？



食分野

継続的な食資源の創出を！

- 既存の資源を有効活用
 - 食資源の数は限りがあるため、既存の資源を組み合わせたり、加工するような工夫が必要。
 - 作物を「栽培する」ことも資源となりうるのでは。
- 農業の6次産業化を拡大する
 - 多様な考えを持つ生産・加工・販売の流れを作り、庵原地区ならではの食資源が継続的に生み出されるようにする。



今後取り組むべきこと

スポーツ

上記の持続可能性を踏まえ、スポーツを通してノルディックウォーキングのような地域スポーツが担うべき新たな役割を果たすためには、スポーツに対する無関心層も含め、子供から高齢者までのライフステージに応じた今回のようなスポーツイベントへの参画をさらに促進することが必要であると考えます。

そのためにも住民同士のコミュニティづくりが重要であり、その一役をスポーツ（この地域の場合は特に“健康志向型スポーツ”）が担っていけるような環境づくりを模索していく必要がある。

食

上記の持続可能性を踏まえ、作物と私たちの距離を近づけることが大切だと考えている。

他地域における食に関する取り組みに目を向けながら、持続可能性を高めていくために必要な要素が何なのか学習し、様々な手段を今後、実践する機会を作っていきたい。

静岡市 東静岡駅前

アートとスポーツによるにぎわい創出

メンバー ※学年は平成29年度

(地域経営) 2年 望月涼介
 (アート&マネジメント) 2年 伊藤純平、黒田亜沙未、白鳥日和子、鈴木夏帆、
 唐坂梨紗子、萩原亜美、橋本直英、平田あかり
 1年 長澤由奈、柚木真里奈
 (スポーツプロモーション) 2年 塩崎陽也、1年 内村仁志、沼田浩範
 指導教員：○講師 名倉達了、教授 白井嘉尚、教授 芳賀正之、
 准教授 祝原豊、准教授 川原崎知洋 ※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡市観光交流文化局文化振興課
 静岡市企画局企画課
 株式会社H.L.N.A

地域概要



写真1：東静岡アート&スポーツ/ヒロバ

静岡市の掲げる「まちは劇場」プロジェクト推進事業の先行的な取り組みとして、2017年に東静岡駅北口の市有地に「アート&スポーツ/ヒロバ」は誕生した。国内最大級のローラーパークがあるスケートパーク、芝生エリア、駐車場兼イベントスペースの3つのエリアからなり、アートやスポーツを介した市民活動が行われるコミュニティの核、市民に根付いた都市文化を生み出す場となることを目的としている。これまでにめぐりアート静岡、各種ローラーパークの全国大会、オクトーバーフェストなどのイベントが大々的に開催されてきた。

〈参考：1年目のフィールドワーク〉

| | |
|------------------------|-----------------------------|
| 2016年 11月1日 ～11月20日 | めぐりアート静岡の各会場鑑賞/ワークショップ等への参加 |
| 2016年 12月21日 | めぐりアート静岡連絡会への参加 (オブザーバー) |
| 2017年 1月17日 | 市の担当者との顔合わせ |

※めぐりアート静岡…東静岡駅前ヒロバや静岡市内の文化施設など多様な場を会場として開催されるアートの展覧会

〈2年目のフィールドワーク〉

取り組んだこと

| I 地域についての学び | |
|-----------------------------|---|
| 2017年 7月20日 | H.L.N.A、ローラースポーツ連盟の方々からの聞き取り |
| 2017年 7月27日 | 長沼地区の自治会有志の方々からの聞き取り |
| 2017年 12月8日 ～12月10日 | ヒロバの認知度や地域の需要を知るための、東静岡地域近辺で地域住民からの聞き取り調査 |
| II イベントの企画・運営方法についての学び | |
| 2017年 5月13日 | コンテナペイントワークショップへの参加 |
| 2017年 7月20日 | 静岡県立美術館の学芸員の方からの聞き取り |
| 2017年 7月27日 | 用宗でマルシェなどのイベントを開催している方からの聞き取り |
| 2018年 2月28日 | 駿河風のワークショップへの参加 |
| III 東静岡アート&スポーツ/ヒロバでのイベント開催 | |
| 2017年 10月14日 | ①めぐりアート静岡と連携したワークショップの開催 |
| 2018年 2月17日 | ②ノルディックウォーキング、フライングディスクを対象にしたニュースポーツイベントの開催 |

Ⅲ東静岡アート&スポーツ／ヒロバでのイベント開催内容

①めぐりアート静岡と連携したワークショップ「作って！交換！カラフルりんご」

めぐりアート静岡に参加した「つながり」をテーマとするアーティスト、小笠原圭吾氏を講師に招き、小学生を対象としたペットボトルを用いた「りんご」を作るワークショップを行った。子供たちは楽しみながらアートに触れることができ、満足げな笑顔を浮かべていた。また、会場内の木々はメンバーで制作した約800個のペットボトルりんごで彩られ、イベントに花を咲かせた。



写真2：りんごのワークショップの様子

②ノルディックウォーキングとフライングディスクを対象としたニュースポーツイベント

東静岡アート&スポーツ／ヒロバや周辺地域の特性を生かし、同地の魅力を発信するという目的で2つのニュースポーツイベントを開催した。使用した道具は今後ヒロバで貸し出す予定である。

ノルディックウォーキング

中学生から大人を対象にヒロバから東静岡地域にある神社や公園を参加者と交流しながら歩いた。高齢の方々への健康増進としてのニュースポーツの推進やノルディックウォーキングを通じた地域住民同士、学生と地域住民の交流ができた。ヒロバの知名度向上にもつながった。



写真3：ノルディックウォーキングの様子

フライングディスク

小学生を対象にヒロバでアートとスポーツが融合したフライングディスクイベントを開催し、フライングディスクを用いたゲームとディスクペイントのワークショップを行った。交流の場の創出とヒロバの特性を生かしたフライングディスク体験による同地の魅力を発信できた。



写真4：フライングディスクイベントの様子

発見した課題

- ・ヒロバの認知度・イメージの向上
- ・より幅広い年齢層を取り込むヒロバづくり
- ・ヒロバ周辺の住民がヒロバに足を運びたいイベント・コンテンツ作り
- ・イベント期間外におけるヒロバの活用方法
- ・効果的な広報活動

取り組むべきこと

- ・ヒロバでの活動にあたり、地域住民や市の担当者との連携を深める
- ・地域住民との交流を図り、東静岡地域の課題やヒロバに求められていることを検討する
- ・地域に適した取り組みをヒロバで実施するため、東静岡地域についての理解を深める
- ・ニュースポーツの道具の貸し出し、イベントの告知などができる掲示板といった地域住民の利用を増進させる継続可能なコンテンツ作りを調整する
- ・今後ヒロバで進めていくべきアート／ニュースポーツコンテンツの企画・運営を検討する

静岡市 駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街のにぎわい創出

メンバー ※学年は平成29年度

(地域経営) 1年 岡本怜音

(アート&マネジメント) 2年 井口紗那、大澤七彩

1年 稲垣茉莉

指導教員：○准教授 井原麗奈、教授 伊藤文彦、准教授 高橋智子

※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者

駒形通四丁目商店街のみなさん

静岡市経済局商工部商業労政課

地域の概要

駒形通四丁目商店街は、静岡県静岡市葵区にある様々なジャンルの商品を取り揃える商店街である。雨の日でも買い物がしやすい、トリコロールカラーのアーケードが特徴である。多くの店舗の営業時間が9:00~18:00であり、夕方には活気を見せるが、静岡駅からのアクセスや集客の伸び悩み、商店街内の店舗同士の繋がりなど、様々な問題を抱えている。



今年取り組んだ事と成果



「えべちゃん」

駒形通四丁目商店街キャラクター。
商売繁盛を願い、七福神の恵比寿を由来とする。

①マップづくり

1年前から進めていたマップが完成

【制作目的】

- 駒形通四丁目商店街を外部の人に知ってもらおう。
- 学生自身が商店街の事を知るため。
- 駒形通四丁目商店街の店主間の繋がりを生むため。



←↑実際に制作したマップ

【商店街内部への効果】

- マップにより活性化に興味を示す店主が少し現れた（報告会の参加者に新しく参加してくださる人が現れた）
- 学生が作った駒形通四丁目商店街のキャラクター（えべちゃん）が、ホームページなどで採用された。

【商店街外部への効果】

このマップの制作をきっかけに、駒形関連の話題が広がるという場面が随所で見られた。まだ直接的に客足が伸びているわけではないため、今後はマップの配布について工夫が必要だと考えられる。

例：ポップをつける、駒形につながるのある店舗に配布する。

②学生ブログの設立

【開設の目的】

- 学生自身の活動の振り返りとして、また商店街活性化の心情や流れを詳しくまとめるため。
- 商店街のホームページと提携する（商店街側と学生側の視点を共有する役割も持つ）
- 持続性のある商店街への刺激を作りたい。

【現状】

- 学生ブログの開設に伴い、商店街のFacebookの更新、デザインの変更を提案。
→各店舗が最新のお得情報を更新。
- 学生ブログと商店街のFacebook、ホームページの連携が完了。
→商店街の情報を外部に共有（拡散）しやすくなる。
- SNSによる様々な効果を検証中。



③ 商店街の旗づくり

【制作目的】

- 今後のイベントや活動の際に使用するため。
→ イベントの宣伝手段
- ④懇親会にて会場に展示

商店街の声

「可愛いですね」
「こういうがあると華やかでいいですね」
「活動が本格的になりそうですね」



④ 懇親会

【実施内容】

- 雑談&食事会
- アンケート調査
- 今後の活動について
- ブログの共有
- 制作した旗の展示



↑ 食事会の様子



↑ 展示されたブログを商店街の方々に見てもらっている様子

【実施目的】

- 商店街の方々の商店街活性化に対するリアルな声を聞きたい。
- 商店街の方々と学生との間の壁を少しでも低くしたい。
- 商店街の店主間の繋がりを生む場を提供したい。

学生の
ホンネ

【実施結果】

- 普段行なっている寄り合いの雰囲気よりも、食事があることによって、緊張感を和らげることができた。
- アンケートにより、今まであまり聞くことのできなかつたホンネを知ることができた。
- 商店街と学生間の壁は少し低くなったように感じられる。



課題

- マップの制作・配布による商店街への直接的な効果がまだ見られていない。
- 商店街と学生との集まりを何度か開催しているが、参加人数が増えず、情報共有や意見交換がスムーズに進んでいない。
- ホームページやFacebook、学生ブログがまだ定着しておらず、有効的に活用できていない。

今後の方向性

- マップの配布を継続するとともに、マップの配布方法を工夫する。
- 何度も呼びかけをして同じような集まりを繰り返すのではなく、学生側が多少引っ張っていく形で物事を進める必要がある。
- 学生ブログの活用方法の検討、積極的な投稿・共有。

今後の具体的なイベントや活動の見込み

- 駒形にまつわる写真を活用した、一般の人々も参加できるようなワークショップの開催
- 駐車場のスペースなどを活用したワゴンセールなどの定期市の開催

提案

駒形通四丁目商店街ホームページ

<http://www.ne.jp/asahi/koma/4/>

ぜひチェックして見てね!



静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー ※学年は平成29年度
 (地域経営) 2年 水野なな子、1年 吉田慎太郎
 (地域共生) 2年 佐藤恵美、西子幸裕、1年 青木佑未
 (地域環境・防災) 2年 服部智美
 (アート&マネジメント) 1年 佐野乃雪
 (スポーツプロモーション) 1年 宮村勇希
 指導教員：○教授 平岡義和、准教授 川原崎知洋
 ※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡浅間通り商店街振興組合
 静岡市経済局商工部商業労政課

地域概要



写真1. 昭和展見学



写真2. 文化財資料館見学

静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ、600メートルの「浅間通り」に存在する商店街。かつては、浅間神社の門前町、または駿府城下町として、静岡の商業、流通の中心地であったが、百貨店やコンビニの進出、通信販売の普及等による客の減少で20年ほど前から衰退が始まっている。平日の昼間でも人通りは少なく、シャッターがおりたままの店が目立つ。

しかし、毎年秋には静岡とタイの交流事業として、この地に生まれタイに渡って活躍した「山田長政」にちなんだ長政まつりが開催されており、多くの観光客が訪れる。また、毎月1日に浅間神社で行われている安倍の市にも、野菜やお菓子などを目当てに地元の方が集まり、賑わい創出の場となっている。

取り組んだこと

| 日付 | FW内容 | 概要 |
|-------------|---------------------------|--|
| ① 2017/6/1 | 浅間神社の神主にインタビュー | 浅間神社と商店街の関係性を知るために、浅間神社の神主に質問したり、神社に関する説明を受けた。 |
| ② 2017/6/15 | 浅間神社見学 | 浅間神社の門前町である商店街を宣伝するためには浅間神社のことをもっと知る必要があると考えた。そのため、2回に分けて神社のことを詳しく学んだ。 |
| ③ 2017/7/1 | 安倍の市にスタッフとして初参加 | 店舗商品の販売やチラシ配りなどを手伝った。 |
| ④ 2017/7/20 | そふと研究室の方にインタビュー | 地域づくりの活動を支える地域密着型のツアー会社の方に、商店街の歴史と現状、神社と商店街の関係性についてのお話を聞いた。 |
| ⑤ 2017/10/8 | 長政まつりにスタッフとして初参加 | 会場の準備、片付け、運営の手伝いを行った。 |
| ⑥ 2017/11/2 | 静岡市文化財資料館&昭和展見学 商店街の紹介 | 商店街を散策しながら、2年生が1年生に対して商店街を紹介した。 |
| ⑦ 2017/12/7 | 吉原・三島商店街見学 | 浅間通り商店街の賑わい創出のためのヒントを得るため、吉原と三島の商店街を見学し、それぞれの取り組みについて聞き取り調査を行った。 |
| ⑧ 2018/1/20 | 商店街の懇談会に出席 | 今まで自分たちが参加したイベントにおいて気づいた点、改善すべき点を商店街の皆さんに伝え、商店街側からも貴重な意見を頂いた。 |
| ⑨ 2018/2/17 | ぶら門前ツアーに参加 | 浅間通り周辺をまわりながら歴史について学ぶツアーに参加。 |
| ⑩ 2018/3/1 | 安倍の市にスタッフとして参加 | 2回目の参加。前回に比べて、店舗数やお客さんの数も増えていた。 |

発見した課題・学んだこと



①～⑩の活動（※上記の表を参照）を通して、以下のような課題・学びを発見した。

| | |
|------|---|
| ①～④→ | 【学び】フィールドワークの活動当初は、神社と商店街の関係性を模索したが、予想していたよりもその2つの関係性が希薄であることが分かり、神社と商店街を結び付けての活性化をすることは困難であるという結果になった。 |
| ⑤、⑩→ | 【課題】忙しさと人手不足などからイベントを受け継ぐ人材を育成することが難しく、今後もイベントを続けていくことができるのか課題として挙げられる。また、安倍の市に関しては、神社から商店街へと人が流れる仕組みを作ることが必要である。 |
| ⑥、⑧→ | 【学び】昭和展では、興味深い展示が多くあったにも関わらず、お客さんが少ないように感じた。そのため、イベントをただ行なうだけでなく広報をすることも大切であることが分かった。また、商店街の懇談会でも参加者の方から「SNSを通しての宣伝をぜひやってほしい」との意見を頂いた。そのため、若者に届くような宣伝の仕方を今後考えていかなければならないと感じた。 |
| ⑦→ | 【学び】他地域の商店街の視察では、行政からの補助金などを利用していることやそれぞれの商店街でポテンシャル（人数、店舗数、資源など）が異なることが分かり、2つの商店街のやり方が全て浅間通り商店街に通用するものではないことを学んだ。浅間通り商店街のポテンシャルを見極めた上で、地域に合った盛り上げ方を常に考えていくべきである。 |
| ⑨→ | 【学び】歴史の説明を中心とする「ぶら門前ツアー」の参加者の中で学生は私たちだけだった。学生向けにこのような企画を考える場合、歴史だけではなく、『食』『スポーツ』といった若者にも興味を持ってもらえるような要素をコンテンツの主軸として考えなければならない。 |

今後取り組むべきこと

SNSによる広報活動

【きっかけ】

- ・文化財資料館及び昭和展を見学した際、来訪者の数が想像よりも少なかった。
- ・商店街側から若者視点での広報活動の依頼があった。

【活動方針】

TwitterとFacebook、インスタグラムなどSNSを用いることで、紙媒体よりも電子媒体が身近となった世代を対象とした情報発信を行う。

静岡大学「春のビッグフェスティバル」への出展

【きっかけ】

最も身近な若い世代といえば、静大生である。そこで、まずは静大生に浅間通り商店街を知ってもらいたいと考え、新入生歓迎行事の一環である「春のビッグフェスティバル」を活用することになった。

【活動方針】

浅間通り商店街に関する情報発信を主目的とし、浅間神社及び商店街の主要店舗の宣伝パネルを製作・展示する。次年度からは浅間通り商店街の商品を販売する模擬店を計画。

若者向けツアーの企画

【きっかけ】

- ・「若い世代を一時的恒常的問わずに集めることによって商店街の活性化の要因を作り出すことが出来る」という仮説を立てたため。
- ・商店街側から若者向けツアーの企画依頼があった。

【活動方針】

ベースとする「ぶら門前ツアー」の開催時期が秋頃であることを踏まえ、「食」「スポーツ」などの要素を取り入れたツアーの企画立案・運営。

安倍の市へのブース出店

【きっかけ】

安倍の市に参加した際、来訪者が神社から商店街へと流れることが少なかったため。

【活動方針】

神社内に休憩スペースを設置し、商店街のアピールを行う。

→安倍の市や長政祭りでは、運営側の人手不足が感じられたため、今後もできる限り私たち学生がスタッフとして参加する。

焼津市 浜通り

浜通りの人や歴史・文化を活かし、多様な交流を育む服部家を考える

メンバー ※学年は平成29年度

(地域経営) 1年 藤田真由、矢ヶ崎花音
(地域共生) 2年 大橋彩香、杉山莉奈、袴田朋伽、宮澤大己
(地域環境・防災) 1年 大橋和真
(アート&マネジメント) 2年 松永千里
(スポーツプロモーション) 1年 種茂勇斗

指導教員：○准教授 太田隆之、教授 橋本誠一

※○はフィールド責任教員

ステークホルダー

焼津市総合政策部政策企画課
NPO法人浜の会

地域概要



焼津市内の街並み

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に1 kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。北浜通・城之腰・鯛ヶ島の3地区に分かれており、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的家屋や小路などの焼津の歴史と文化が豊富にある地域である。例として、明治時代に怪談小説で有名な小泉八雲が滞在し、多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資源だけではなく、地区ごとの夏祭りや「夏のあかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。浜通りの町並みの保存や活性化を目指し、平成28年に浜通り活性化フォーラムが組織され、活動が行われている。

取り組んだこと



あかり展参加にあたって作成した行灯

●「夏のあかり展」への参加

定例のイベントである「夏のあかり展」へ参加した。地域創造学環として1つの行灯を製作した。また、来場者に聞き取り調査を行い、今後のあかり展のあり方と浜通りの空き家の活用のためのアイデアを得た。

●旧服部家活用のためのワークショップへの参加

NPO法人「浜の会」の方たちと学環学生でワークショップを行い旧服部家活用に向けたアイデアを検討した。食と観光を中心とした場にしたいという意見が多く出た。

●旧服部家活用のための視察

旧服部家活用のため春休みに視察を行った。まず、岐阜県岐阜市にある川原町に行った。そこでは、川原町まちづくり会事務局長であり「御菓子司 玉井屋本舗」の玉井さんの話を聞いた後に川原町を見学した。次に、松崎町と南伊豆町に行った。松崎町では、「蔵ら」を見学し、運営理念などを伺った。南伊豆町では役場の方から空き家を、お試し移住として提供しているという話を伺い、実際に空き家の中に入れてもらった。

成果



ワークショップにてあかり展アンケート調査報告を行う様子

●「夏のあかり展」来場者へのアンケートの実施

8月5日、6日の2日間にわたり、来場者や関係者の方々50名に対し、「夏のあかり展」や浜通りの印象等に関するアンケートを行った結果、一定の傾向を読み取ることができた。中でも、浜通りの住民の若年世代が、浜通りの歴史に触れる機会が少ないことがわかった。また、お店の出店による、賑わいを求めていることがわかった。

これらの結果を今後の浜通りの活性化を進める上で、住民の意見を反映したまちづくりをするための材料として活用できると考える。

●旧服部家ワークショップ

服部家保存活用計画が完成した。(方向性)

1. 地域住民と観光客が利用することを想定して保全活用する。
2. 広い間取りと敷地を効率的に活用する。
3. 活用主体や維持管理も想定しながら具体的な活用方法の検討を進める。

課題

●浜通り活性化のための弱み（浜通り活性化計画より）

浜通りでは、全国的に認められる傾向と同じように、人口減少と少子高齢化が進んでいる。このため、浜通りおよびその周辺では空き地や空き家が増加しつつあり、地域の活気が失われていってしまう。この現状の中で、人口減少、少子高齢化を食い止めるべく、地域住民が自らの地域に対する意識を向上し、地元愛を高めていくことが求められる。また、昨年度検討した旧服部家を活用した建物がこの地域の魅力の発信基地となり、交流人口増加と、地域活性化に貢献することが求められる。

●学生の疑問点・感じた事

- ・旧服部家の活用を図るだけで、浜通りに人を集めることは果たして可能なのだろうか。
- ・活用計画と浜通り周辺地区景観まちづくり重点地区協議会の、それぞれが持つ服部家の将来像に統一感が感じられなかった。
- ・今後の活用に学生があまり関わることができていないと感じているため、今後どのように関わっていくべきなのかが不明瞭。
- ・東京オリンピックまでの完成という目標は間に合わないのではないか。

今後取り組むべきこと

●「夏のあかり展」について

来年度も来場者へのアンケート調査を実施する。今年は初めての取り組みだったため、この調査が服部家活用計画策定に貢献できたという実感は少ないが、活性化に向けた示唆をより多く得られるように質問項目等を検討していく。アンケート結果が、服部家の活用に限らず、浜通り周辺地区及び、焼津全体の状況を把握することのできる材料となることを目指す。

●旧服部家の活用

今後、学生がどのように関わっていくことができるのかということ、主体的に検討していく。

●地元高校生との交流

- ・静岡県立焼津水産高校の皆さんと連携を図り、浜通りや焼津のまちづくりに関する意見交換等を行っていく。
- ・服部家の活用について、地元学生の考えを聞く。

若者の文芸離れを食い止めよう

メンバー ※学年は平成29年度

(地域経営) 2年 大石清香、望月涼介

(地域共生) 1年 前島芳郎

(地域環境・防災) 1年 伊藤悠希

(アート&マネジメント) 2年 松永千里、1年 古川綾乃

指導教員：○教授 袴田光康、准教授 井原麗奈

※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域・施設概要



平成27年4月よりクリエート浜松内の4階及び5階フロアの一部に移転し、リニューアルオープンした浜松文芸館は、浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を数多く収集・保存しています。

郷土の生んだ優れた文芸作家の業績を次代に引き継ぎ、市民文化の向上を図るため浜松の文芸人の収蔵品を中心にした平常展、作家、ジャンルに視点を当てた企画展を開催しています。

また、俳句、文学史、言葉など、広い文芸分野をテーマにした講座を開催し、身近に文芸を学び、楽しむ場、そして、文芸にふれ、多くの人々と語り合う場にふさわしい環境づくりをすすめています。

課題



近年、若者の文芸離れが深刻化しており、浜松文芸館もその例外ではありません。文芸館の認知度の低さとその解消方法が大きな課題となっています。

展示

- 文芸館を代表する10人の文芸人が親しみを持ちにくい (藤枝静男 相生垣瓜人など)
- 浜松ゆかりの文芸人があまり知られていない (作家 鈴木光司など)

企画

- 場所がわかりにくい
- 若者向けの講座が少ない

広告

- 限られた場所にしかチラシが置かれていない
- 文芸館自体のチラシがない

全体

- 文芸館を目的に来館する人が少ない
- 若者の集客が困難である
- 移転したことが知られていない

今年度取り組んだこと



今年度は広告の作成に専念し、実際に「浜松文芸館を紹介するための広告」を完成させ、現在浜松市内の各所で活用されています。

浜松文芸館を紹介するための広告ということもあり、「浜松文芸館をどのように宣伝するのか」についてを昨年からの検討し、完成までに約一年をかけました。

キャッチコピーの提案から始まり、写真の撮影から、チラシ裏面の文章構成まで全て自分たちの手で作りあげました。

長期間の検討による検討を重ね、ようやく完成したポスター・チラシは浜松文芸館のスタッフや、浜松市文化振興財団の方々にも好評でした。

今後取り組むべきこと



今年度主に進めていくことになるのは課題でもあった「若者向けの企画」になります。

2年生と3年生がそれぞれ別の企画を担当し、つまり2回分のイベントを企画することになっています。開催年度が今年の8月を予定しているため、早急な企画の決定が求められています。

現在、企画の内容については完成しており、企画書の完成から、宣伝方法の考案や、宣伝用のポスターや資料の作成へと進めていく予定となっています。

前年度同様に、約一年の期間をかけて行うことになるので、メンバー一丸となって進めていけるよう頑張っていきたいと思います。

浜松市 佐久間町

中山間地域の地域再生実践

メンバー ※学年は平成29年度

(地域経営) 2年 伊神翔央汰、木下湧太、佐々木直人

(地域共生) 2年 大野美晴、藪野華奈、1年 末広卓

(地域環境・防災) 1年 清水大暉

(スポーツプロモーション) 2年 加藤楓、藤浪茉央

指導教員：○准教授 皆田潔、教授 江口昌克、教授 河合学、

准教授 山本崇記

※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者

浜松市天竜区佐久間協働センター

佐久間パンキンレディース

浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊）

地域概要



左：佐久間風景 右：川合花の舞

浜松市佐久間町は、天竜川の上流に位置する中山間地域である。佐久間の豊かな自然には、多くの民話が残されており、「歴史と民話の郷」と呼ばれている。

人口減少や高齢化の地域課題を抱える中、多くの地域住民が、様々な地域づくりに参画し、佐久間を支えている。毎年秋に開催される「川合花の舞」では、地元の子どもから大人までが伝統の舞を披露し、会場となる八坂神社は舞手や観衆で活気にあふれていた。また、新そば祭りや佐久間ダム竜神祭りでは、住民の手によって地元の特産物が販売され、佐久間の底力を感じることができる。

地域づくりの担い手としてはNPO法人が中心となり、佐久間と他地域、人と人とを結ぶ大切な機能を果たしている。

私たちが感じた地域の課題

- ① 佐久間の地域活動団体の構成員が高齢化し、組織の活動力の減退、イノベーションを起こそうとする意欲の低下が見受けられる。
- ② この原因のひとつとして、団体間の横のつながりが弱く、個々（点）の活動は見られるものの、協働による地域一丸となって佐久間を盛り上げようとする推進力があまり感じられない。
- ③ 魅力のあるスポットが多数あるにも関わらず、外部に向けた情報発信が不足していることにより、観光客の認知度が低い。

これらの課題について、年度当初、私たち学生がどのようにアプローチができるか、議論を深めた。



今年度取り組んだことと成果

前述の各課題に対応するため、今年度は以下の取り組みを行った。

- ① アワビの陸上養殖事業に関わり、飼育作業を体験。収益向上のためには食用の他にも貝殻の活用など付加価値形成が欠かせないことを学んだ。
- ② 佐久間ダム竜神祭りなどのイベントに浜松山里いきいき応援隊の小川さんと共に参加し、域外からの来訪者に対して佐久間のPRを行った。地域のつなぎ役を目指すと共に、佐久間の住民のみなさんとの交流を深め、私たちの活動の認知度向上を図った。
- ③ 佐久間の女性による加工グループ「佐久間パンキンレディース」さんが製造する、白ゴマと黒ゴマを使ったお菓子「ごまちゃん」の販売力向上に取り組んだ。
特に購入者のターゲット拡大を目指し、既存の「ごまちゃん」に新しい風味を加えたアレンジに取り組み、商品力強化を目指している。
- ④ 地域情報の発信力向上のため、学生がまちあるきで発見した魅力のあるスポット紹介や、学生の活動の認知度を高めるための広報誌「サクッとさくま」を発行した。

以下に、「アワビ事業」「ごまちゃん」「サクッとさくま」の活動について紹介する。

アワビの陸上養殖事業

• 水槽の清掃手伝い



• 貝殻を使ったアクセサリーづくり



「ごまちゃん」の風味の多様化に挑戦

- ・パンプキンレディースさんと一緒に、オリジナルの「ごまちゃん」に様々な食材を組み合わせ、試作・試食を繰り返して、購入層の拡大を目指す。
- ・「佐久間ダム竜神祭り」にてブースを設け、「アレンジごまちゃん（抹茶・ピーナッツ・ココア・カレー味）」の試食会を実施した。
→4つの味の中では、特にピーナッツが人気だった。モニターからは「(アレンジは) 子ども受けしそう」、「もう少し抹茶風味が欲しい」など様々な意見を収集。
- ・モニター調査と並行して、パンプキンレディースさんお手製の商品の販売に協力した。



パンプキンのお母さん方が作る佐久間のお菓子



パンプキンのお母さん方と一緒にごまちゃん作り



ごまちゃんアレンジの試作を食べてもらう様子

学生編集による広報誌「サクッとさくま」発行とフィールドワーク活動紹介の場の設置

- ・学生視点で佐久間の魅力を紹介するパンフレットの発刊を決め、佐久間協働センターの協力を得て、今期2号を発刊、次年度からは年4回の発行を予定する。
- ・サクッとさくまは、佐久間ダム電力館2階に配架。第1号は初版100部配架後、100部増刷した。
→この反響は多くの地域住民や観光客の方の手にとってもらうことで実感でき、第2号以降の製作活動のやりがいに直結している。
- ・佐久間電力館の御厚意で、電力館2階の交流スペース一角の壁面を提供していただき、フィールドワークの活動紹介ポスターやこれまで行ったワークショップや佐久間活性化のための議論の様子をまとめた資料を掲示している。



第1号 佐久間のグルメ編



第2号 佐久間の自然編

今後取り組む内容

アワビ陸上養殖事業連携

- ・養殖に関わる人たちの実体験や想いを聞き、それを商品となるアワビの付加価値とすることで、販売に貢献したい。
- ・「サクッとさくま」アワビ特集を平成30年度内に発刊予定。アワビの生態や養殖技術の知識やマーケティングを学ぶ。

ごまちゃんのファン拡大

- ・パンプキンレディースさんの活動と「ごまちゃん」の認知度向上を目的とし、「サクッとさくま」で特集を組む。
- ・アレンジを加えた「ごまちゃん」のパッケージデザインの考案・作成に取り組む。
- ・他団体との連携や営業活動に取り組み、販路拡大のため具体的活動を実行する。

サクッとさくまの発行

- ・平成30年度は4回発行する。
- ・より多くの人の手にとってもらうため、企画のブラッシュアップや取材や編集能力を高める。



| サクッとさくま 発行実績と計画 | Vol.1 | Vol.2 | Vol.3 | Vol.4 | Vol.5 | Vol.6 |
|--------------------|---|---|---|--|--|-------------------|
| | ← 発行中 → | | ← 作成中 → | | | |
| 発行月 | 平成29年9月 | 平成30年1月 | 平成30年5月予定 | 平成30年7月予定 | 平成30年10月予定 | 平成31年1月予定 |
| メインテーマ | 佐久間のグルメ情報 | 佐久間の風土・自然 | パンプキンレディース ごまちゃん | アワビの陸上養殖 | 宿泊施設 地域イベント | 検討中 |
| 内容 | 佐久間町内の4飲食 店を訪問し、おス スメ料理や位置情報等 を紹介した。 | 既存の観光パンフや 聴き取りから6箇所 の景勝地を踏査し紹 介した。 | パンプキンレディ ースさんの活動とご まちゃんに焦点を当 てる。 | 養殖の様子やアワ ビの貝殻を使ったア クセサリーなどを紹 介する。 | フィールドワークで お世話になっている 宿泊施設などを紹 介する。 | 2018年6月頃 決定予定。 |

田園空間博物館 とうもんの里

産地直売施設運営と交流人口拡大

メンバー ※学年は平成29年度

(地域経営) 2年 豊住太一、1年 久保山健太
(地域共生) 1年 濱鳴ななみ
(スポーツプロモーション) 2年 海野真由、金森彩葉、小西涼奈、佐藤まどか、
七海遥喜、宮川佑紀乃
1年 多治見帆香、萩原那緒

指導教員：○教授 日詰一幸、准教授 石川宏之

※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者

NPO法人とうもんの会

蓮舟寺のみなさま

地域概要

横須賀地区は、掛川市南部に位置する、人口7,687人(平成29年3月末)から成る地区である。海やみどりの自然に囲まれ気候も温暖であり、また、横須賀城跡をはじめ三熊野神社や清水邸庭園などの文化・歴史性にも富んだ魅力あふれる地域となっている。地域の人の繋がりが強く、祭りなどの伝統行事を通して交流を深めている。

とうもんの里は、NPO法人「とうもんの会」の運営のもと、地域の自然・農業、歴史や伝統文化を保全・継承することを目的とし、地域活動を行う田園空間博物館である。辺り一面には田園風景が広がっており、四季折々の美しい情景が見られる。地域の採れたての農産物を直売する朝採り市のほか、農村の暮らしを楽しみながら体験できる農業体験・食体験・歴史自然観察などのプログラムも開催されており、地域住民の交流の場ともなっている。



とうもんの里から見た田園風景



とうもんの里の外観



三熊野神社大祭

課題

●横須賀地区

・自己完結的な地区

→祭り等の伝統行事の存在は、住民1人1人が役割を持つことなどから、住民間の関係構築に貢献する一方で、新たに移住してきた人たちはよそ者感や入りにくさを感じてしまうことも。

・公園等の子供の遊び場となる施設の少なさ

→外で遊ぶ子供の姿が見えないと、活気が無いように感じられる。

●とうもんの里

・情報発信力・認知度の弱さ

→常連客が多く新規客が少ない等の出口調査の結果や、掛川市の観光パンフレットにとうもんの里の情報があまり詳しく掲載されていないことから読み取れる。

・利用者の高齢化、若い世代の利用者の少なさ

→とうもんの里には、子どもが集い、笑顔があふれる施設にしたいという思いがある。

・交通の便の悪さ

→バスは1時間に1本あるかないか。

横須賀地区は高齢者が多く、徒歩や自家用車頼りの集客には厳しい面も。

平成29年度の取り組みと成果

◎平成29年度フィールドワーク目標 【子供を呼び込むための環境づくり】

- とうもんの里の行事「ふるさとの道ウォークとみかん狩り」でのイベント企画
→前年度より完成度の高い生搾りみかんジュース提供、目標としていた"子供5人の参加"を達成することができた。
- 「しぜんの図書館」の実施
→とうもんの里施設にある本と自分の本を交換できるイベント「本の交換会」をアレンジした企画である。とうもんの自然を体感できる屋外読書スペースの設置や、学生による読み聞かせ体験などを実施して、来館した子供たちと親密な交流をすることができた。
- とうもんの里屋外スペースでの遊具の設置
→製作したブランコと竹ぼっくりで子供の遊んでいる姿を見ることができた。
- 学生企画「とうもん図鑑」への取り組み
→子供たちが身近な生物や環境への関心を高めるような企画内容。現在、その企画のマニュアルを作成する段階までこぎつけた。
- 広報活動
→SNS（Twitter、Instagram、Facebook）のアカウント作成、活動内容の発信を行った。



生搾りみかんジュース作り



しぜんの図書館

今後取り組むべきこと

• 昨年度のイベントの改善企画

昨年度のイベントとして『ふるさとの道ウォークとみかん狩り』『しぜんの図書館』等を実施したが、様々な反省点が見えた。それらを踏まえ、とうもんの里利用者と地域住民がより満足できるようなイベントにしていく必要がある。

• 新たなイベントの企画

『しぜんの図書館』のように学生主体で一から考え、とうもんの里ならではの資源を活用し、さらにとうもんの里が地域の拠点となっていくようなイベントを作っていきたい。

• 『とうもん図鑑』の企画の仕上げ

未完成である『とうもん図鑑』の企画を完成させ実施に移すべく、今後もデモンストレーションを繰り返していく必要がある。その際、学生だけで行うのではなく、地域の子どもたちに協力してもらい、実際のイベントのような形で行っていきたいと考えている。

• 情報発信の強化

とうもんの里の課題の一つである『情報発信力・認知度の弱さ』を解決すべく、昨年度からSNSを中心とした広報活動を行っている。今後は、更新頻度を増やすなどして活動をより強化し、加えてチラシの作成・配布等を行うことで情報発信をより充実させていく必要がある。

松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー ※学年は平成29年度
(地域経営) 2年 和泉直人、遠藤有紗、影山舞、本田圭美
1年 長田結衣
(地域共生) 1年 望月南緒
(スポーツロモーション) 2年 吉澤公史、1年 黒墨世菜
指導教員：○教授 阿部耕也、特任助教 佐藤直樹、
教授 杉山康司、准教授 皆田潔
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町商工会
静岡県立松崎高校

静岡市から駿河湾を挟み、ちょうど反対側、四方を山と海に囲まれ、花が綺麗に咲きほこる松崎町です。大学からバスで3時間と半。トイレなしには行けません...そんな松崎からの活動報告です。

魅力集め

今年度は商店街を飛び出し、広く松崎を探り、たくさん魅力を発見しました。

〈主な活動内容〉

桜葉収穫体験、まち歩き（石部、雲見方面）・堂ヶ島、シェアサイクル利用



←桜葉収穫体験
葉のサイズが18cm以上になると収穫できます。葉は、1枚ずつ手作業で摘みとり、塩漬け状態へ加工します。



←烏帽子山
300段に及ぶ石段を登り切りました。苦労もあり爽快感はひとしおです。途中で会った老夫婦が、いとも簡単に登っており私たちが年を感じました。



←岩科学校
日本で三番目、伊豆では最古の小学校です。隣接する開花亭では土産販売、喫茶ができます。川のりと桜葉アイスのハーフ＆ハーフは松崎の味を一度に満喫できるお得で贅沢な一品です。



←シェアサイクル
松崎商店街周辺散策の新しいツール。伊豆まつぎ荘など、3箇所ステーションが存在。15分130円～都合に合わせて使用可能。温泉、気持ちよかったです♪

秋祭りへの参加

秋祭りに準備・本番と参加しました。普段はなかなか見られない松崎の活気を味わいました。祭りが地域のアイデンティティとなり、これを機に帰省する人もいるなど、祭りを維持していくことの意味を学びました。

〈主な活動内容〉

秋祭り準備・・・縄作り体験（藁こき）、三番叟りハーサル見学

秋祭り本番・・・地域巡回、三番叟、叩き合いの見学、片付け奉仕活動



↑三番叟とは五穀豊穡を祈念する能のこと。松崎町内でも場所によって表現に違いが見られるそうです。



↑三番叟での鼓にトライ。一見簡単そうに見えますが、素人では音がなりません。指がちぎれる夢を見るほど練習を重ねるそうです。



↑叩き合いの様子。三方向から商店街T字路に集い、太鼓を叩き合う。松崎の祭りでのボルテージが最高潮に到達する瞬間です。

地域の方との交流

今年度も多くの地域の皆様にお世話になりました。松崎高校の学生との交流も実現し、高校生の素直な意見が聞けました。また、私たちの活動を知っていただけるよう、広報紙「静大通信」の作成を開始しました。

〈主な活動内容〉

松崎高校との交流会（賀茂地域の将来性についてのワークショップ、大学生活について紹介など）



↑松崎高校の皆さんと。生徒会の学生を始め、大学進学についてや、地元地域づくりに興味のある学生など18名に参加していただきました。



↑ワークショップでは賀茂地域の将来性について文化や防災など6ジャンルについてグループごとに議論を行い、話し合ったことを紹介してもらいました。



↑後半は大学生が個々の大学生活について高校生に紹介。高校生にとって少しでも実りある時間になっていれば幸いです。

地域が抱える課題と、これからの活動

2年間の活動で見えてきた課題です。発見した段階から、確固たるものに進化してきました。

・松崎の知名度

→地理的な通過点であること、知る人ぞ知る観光資源にとどまっていること。

・高等教育機関が少ないこと

→若年層の人口流出が自然と少子高齢化につながっているのではないか。

・観光客数の季節ごとの格差

→夏は海水浴客でにぎわうが、冬は極端に減少してしまうこと。

・伝統、歴史の継承

→今ある文化を誰が受け継いでいくかということ、祭りの存続がカギになること。

・交通の不便さ

→洋服や映画を求めて車で2時間、三島まで出向くという高校生の話。高齢者の移動手段など。

・地域づくりへの興味・関心

→様々な人、特に若い人達において、松崎について考える機会が減少しているのではないか。

これからは

上記の項目を踏まえながら、これからは松崎について幅の広い年代層の声を聞きながら、諸事案について検討する機会を増やしていきたいです。高校生とのコラボも継続したく、まち歩きなどを通して、商店街を始め、地域に関して考える場を作っていきたいと思っております。活動報告を静大通信で地域の方のお手元に届けます。見つけた際にはぜひ、私たちの活動を気にしていただければ幸いです。

～松崎町のプロフィール～



人口6951人（2014）伊豆半島南西部に位置し、「花とロマンの里」のキャッチコピー通り四季折々の景観が楽しめる。静岡から車で約3時間、沼津から約2時間。

松崎町 観光と防災

防災と観光の両立

メンバー ※学年は平成29年度
(地域経営) 1年 中山理紗
(地域環境・防災) 2年 太田智輝、杉山尚暉、1年 勝谷勇介
(アート&マネジメント) 1年 中村実李
指導教員：○准教授 原田賢治、教授 岩田孝仁、教授 小山真人
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町総務課

東日本大震災から松崎防災へ

2011年3月11日「東北地方太平洋沖地震」

それまでの想定を大幅に上回る甚大な被害をもたらし、岩手・宮城・福島の東北3県の沿岸部を中心に約2万人の尊い命を奪った。この大震災は、災害対策への新たな課題を提起するものとなった。(静岡県第四次地震被害想定第一次報告より)



松崎町では、想定される津波に対しての現況地盤及び、既存施設の高さが必要堤防高を満たしていない。

この問題に対し、観光産業を中心とする松崎町の特徴から、岩地地区を除き結論が出ていないのが現状であり、これが既存の地域課題である。

今年度取り組んだこと

- ◆5月30日 土肥での防災に関する話し合いに参加
- ◆6月3日～4日 区長さん、豊崎ホテルの豊崎さんにインタビュー
- ◆7月25日 ジオパーク世界大会に参加
- ◆8月10日～11日 南伊豆での発表会
- ◆10月28日～29日 秋祭り準備
- ◆11月2日 土肥での防災に関する話し合いに参加
- ◆11月3日 秋祭りに参加
- ◆2月18日～20日 3日間に渡り松崎町と岩地地区の方にインタビュー調査

主な活動内容

2018年2月18日～20日にかけて松崎町と岩地地区の住民の方に

- インタビュー調査を行った。このインタビュー調査は、
- ①松崎町の地域課題である防潮堤の必要性を協議会に参加していない住民はどのように考えているのか。
 - ②岩地地区は地区協議会において嵩上げを行わない方針の決定を松崎町や岩地地区の住民はどのようにとらえているのか。

以上のことを調べるために実施された。次のページに調査方法およびその結果を示す。



実施方法

対象地区を徒歩で散策し、その場で出会った方にインタビュー調査の了承を得てお話を聞かせていただいた。

所要時間

平均20～30分

設問

- ◆ 年代 ◆ 性別 ◆ 職業
- ◆ 子供の有無
- ◆ 移住者か
- ◆ 避難訓練に参加しているか
- ◆ (上に対して) 参加頻度はどのくらいか
- ◆ 協議会へ参加しているか
- ◆ ▲ 防潮堤についてどのように考えているか
- ◆ 岩地地区の▲土地のかさ上げの選択についてどう思うか

対象地区

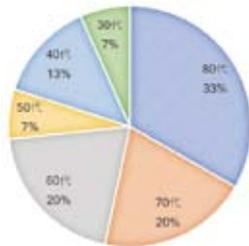
松崎町中心市街地沿岸部、岩地地区

有効回答数

15 (うち松崎地区11、岩地地区4)

活動の結果と考察

◆ 年代

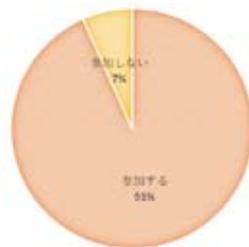


「若い人がみんな出てっちゃってね…」

- ・年代に偏りがある
- ・10～20代が皆無

- ・若い世代が流出してしまう

◆ 避難訓練に参加しているか

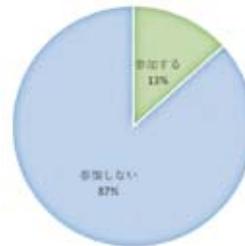


「うちの地区はみんな来とるよ！海が近いからね」

- ・避難訓練の参加率は非常に高い

- ・近隣住民同士の深い繋がりが関係しているのではないかな

◆ 協議会へ参加しているか

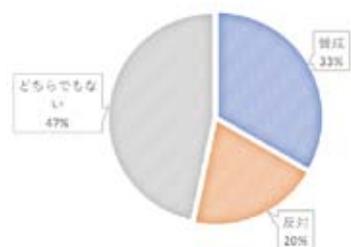


「協議会なんてやってるの、へえ」

- ・津波対策協議会への参加率は低い (そもそも知らない)

- ・広報力不足では？

◆ 防潮堤についてどのように考えているか



「子供が小学校にいるので、移転して欲しいです」

- ・子育てをする世代の方の多くは肯定的
- ・防潮堤のメリット・デメリットが正しく理解されていない

- ・情報の錯綜の可能性

今後取り組んで行きたいこと

- ◆ ▲ 防潮堤が観光に与える影響などを具体的に整理し、● 議論を円滑に進めるための情報提供を行う
- ◆ 両立の難しい観光と防災を掛け合わせた取り組みを進めていく
- ◆ ▲ 防潮堤・水門のメリットとデメリットについての正しい情報発信を行う
- ◆ 地域創造学環のコース性を活かした ▲ 防潮堤のデザインの提案
- ◆ 2018年2月に実施したインタビュー調査では、10代20代の方に話を聞くことができなかった為、意見を聞くことができる ● ワークショップ等を実施する



新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

メンバー ※学年は平成29年度
(地域経営) 1年 池田橋平、小山莉乃、増田彩香
(アート&マネジメント) 1年 梅田留奈
指導教員：○教授 阿部耕也、准教授 皆田潔
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
NPO法人ローカルデザインネットワーク

地域の概要



フォトコンテスト最優秀賞より

私たちがお世話になっている東伊豆町稲取について簡単に紹介したい。稲取は「食」と「景観」と「文化」の3つに主な魅力がある町だと言える。

食では「稲取キンメ」という金目鯛が有名である。この金目鯛は「日本一美味しい金目鯛」とも言われており、全国的に高い評価を受けている。

景観では町から見えるきれいな海や、落ち着いた雰囲気のある町並みがあり、心を落ち着かせられる。また、稲取細野高原では、伊豆七島を含む広大な海を望むことができ、夜には満天の星空を眺めることができる。さらに秋には黄金色に輝く一面のススキ野原が訪れる人を楽しませている。

最後に文化では「雛のつるし飾り」が有名である。毎年1月20日から3月31日まで稲取温泉において「雛のつるし飾りまつり」が開催されており、この祭りには毎年多くの人々が訪れている。

取り組んだこと

[第1回 2017.11.11~2017.11.12 町歩き・名所巡り]

1日目はダイロクキッチン周辺をNPO法人ローカルデザインネットワークの皆様、「ひがしいず日和写真部」の方々と共に、カメラを片手に町歩きを行った。2日目は車での移動を伴って東伊豆町の観光名所を巡らせていただき、稲取の魅力を発見することができた。

2日間のフィールドワークを通して感じた東伊豆町の魅力、課題についてブレインストーミングを行った。このブレインストーミングによりSNSを利用した東伊豆町の魅力発信方法について考え始める。

[第2回 2017.12.2~2017.12.3 フォトコンテストの企画固め]

第1回フィールドワークで提案されたフォトコンテストの企画案を固め、ダイロクキッチンで販売するためのお菓子や飲み物の試作品作りも行った。

[第3回 2018.1.19~2018.1.21 ハートプロジェクトin東伊豆の開催]

「雛のつるし飾りまつり」の開催と同時に静岡県内大学生を対象に「ハートプロジェクトin東伊豆」というフォトコンテストを開催した。Twitter、Facebook、Instagramを利用して大学生の参加を募集し、2大学19人の参加者が集まった。

このイベントの目的は大学生がフォトコンテストを通じて稲取の良さに触れ、また来たいと思わせることである。参加者にはフォトコンテストだけでなく、「雛のつるし飾りまつり」が主催するスタンプラリーにも参加して貰うことでより稲取について知って貰う為の仕掛けを作った。また、このイベントはプレ開催として行ったものであり、来年以降も続けていくかどうかをきめるための実験的なものである。イベント開催後には参加大学生に今回のイベントについてのアンケート調査を行った。



どちらもフォトコンテスト優勝賞より

発見した地域の課題

• 地域の魅力の発信方法

東伊豆町には美しい景観、多くのイベント、暖かい人々、おいしい食事といった魅力的なものがたくさん存在する。しかし、これらの魅力の情報発信力が弱い、情報の受け皿が少ないという点が課題として挙げられる。

• 人通りの少なさ

第1回フィールドワークでの町歩きで東伊豆町の人通りの少なさを感じた。人が行き交う稲取の姿を見ることができるよう今後も活動していきたい。

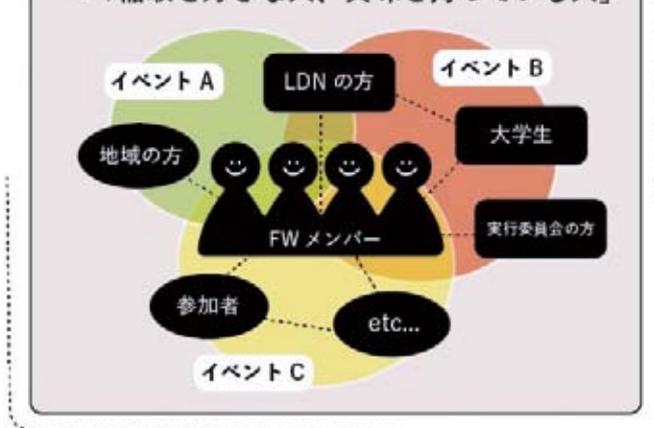


フォトコンテスト審査員特別賞より

今後の取り組み・方針

UCHIRA

= 「稲取を好きな人、興味を持っている人」



大目標「人が行きかう稲取」

フィールドワーク目標「“UCHIRA”を増やす」

「人が行きかう」ためには、「イベント企画」や「情報発信のツール」だけでなく「人が来るための交通インフラ」「目的になり得る名物」など多くの要素がある。これらはすでに稲取内にあり、そして地域に入って日の浅い私たちが作るものではないと判断した。

そこでフィールドワークの目標を「仲間作り」にした。私たちにできないものは地域の人に助けを求めばよいのだ。今回のイベントでは、私たち「フィールドワークメンバー」、受け入れ先の「NPO法人Local Design Network (LDN)」、スタンプラリーの地図をさせていただいた「稲取つるし飾り祭り実行委員会」の皆さん、イベントへの「参加大学生」という「仲間」が出来た。私たちはこのつながりを「UCHIRA (うちら)」と称し、今後もUCHIRAを増やす活動を続けていきたいと考えている。

今後もイベントを企画し、仲間を作っていけば目標は達成される。しかしそこで終わってはいけないと思う。私たちが大切にしたいのは「仲間同士が仲間になること」だ。私たち学生が（静岡大学がLDNとの授業を行わなくなって）稲取を抜けた後も町にコミュニティーが残り、稲取にあるイベント団体が掛け算しながらより良いものになり、自分たちの力で活動を続ける力にできる。そういった未来の先に私たちは「人が行きかう稲取」を見ている。

伊豆半島ジオパーク資源の環境モニタリングと保全方策

メンバー ※学年は平成29年度
(地域環境・防災) 2年 勝又壮平、1年 上田啓瑚
指導教員：○教授 小山真人、特任准教授 山本隆太
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
伊豆半島ジオパーク推進協議会

フィールドワーク概要

「見慣れた地形・風景には、すべて意味がある。」伊豆半島ジオパークは、伊豆半島の自然とそこに育まれた地域社会のつながりを可視化する場である。ジオパークを通してその地域の資産をより深く理解し、地域の発展に役立てることができる。本フィールドワークは平成29年10月からスタートし、ジオサイト（ジオパークが定めた主要見学サイト）の価値・現状の理解ならびに、その環境モニタリング方策の検討・実践を行った。



下白岩ジオサイトの視察

〈主な実践事項〉

(1) ジオサイトの視察

伊豆半島ジオパークの価値と現状を理解するために、主要なジオサイト（候補地含む）の視察を実施した。視察したのは、下白岩の大型有孔虫化石、梶山タービダイト、船原スコリア丘、荒原の棚田、旧湯ヶ島小学校、旧天城トンネル、浄蓮の滝、伊豆半島ジオパーク天城ビジターセンター、伊豆半島ジオパーク中央拠点施設「ジオリア」、旭滝、天城山稜線歩道、八丁池、滑沢溪谷（以上は伊豆市）、沼ノ川北スコリア丘（河津町）である。

(2) 環境負荷センサーの開発

ジオサイトの保全に役立てるための環境モニタリング方策として、環境負荷測定センサーの開発を実施した。開発に用いた「Arduino」は、多種かつ安価な電子基板モジュールを組み合わせ、それらをマイクロコ

ンピュータで制御することで目的の装置を自作可能としたシステムである。また、多数の制御プログラムが無料で公開されているために、それらを組み合わせる形で、目的に見合った制御ソフトウェアが手軽に開発できる利点がある。

取り組み

(1) 活動内容

第1回 2017年10月21日(土)、22日(日)

伊豆半島ジオパーク推進協議会顧問の小山真人教授と同協議会の鈴木雄介研究員の案内によって主要なジオサイトを視察した。

第2回 2017年11月11日(土)、12日(日)

天城山稜線歩道を視察し、八丁池付近にて環境負荷センサー設置候補地の検討後、環境負荷センサー開発の準備作業を行った。

第3回 2017年12月9日(土)、10日(日)

ジオリア内で、センサーの開発及び動作確認を行った後、河津町内のこがね橋でトレイルランニング大会のランナー通過数をセンサーでカウントする実地試験を行った。



沼ノ川北スコリア丘断面の視察



実地試験の様子

(2) 環境負荷センサーの開発

通過する人や動物の数をカウントすることによって環境負荷を定量的に把握するためのセンサーを開発した。

センサーの種類としては、他種センサーとの比較検討の結果、超音波距離センサーを使用することとした。発信から受信までの時間から距離を算出し、その距離が一定値以下となった回数をカウントし、その日時を記録するプログラムを組んだ。その上で、前述の大会での実地試験を通じて、超音波の発信間隔ならびにカウントのトリガーとなる距離減少幅の調整を行った。また、大学構内でも実験し、電池による駆動時間の計測や環境を変えても動作が有効か等の確認を行った。

結果と課題



環境負荷センサー開発の様子

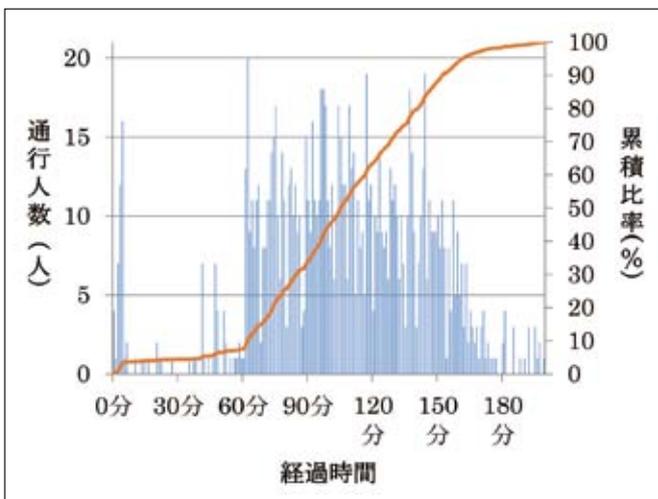
(1) ジオサイトの視察

ジオサイトの視察を通じて、伊豆半島の大地の歴史を理解するとともに、その上で育まれた生態系や地域社会の景観や文化とのつながりを深く理解することができた。しかし、半年間で学んだものはあくまで概観であり、見方の一部である。より实际的で具体的な考察や課題発見を今後進めていく必要がある。

(2) 環境負荷センサーの開発

現在、センサーは開発段階にある。大学内での実証実験は完了し、カウント機能は完成域に達している。しかし、電池での稼働時間が約6時間と短いこと、現行の単一センサーでは並行して移動している物体のカウントができないこと、などの課題を抱えている。

展望



トレイルランニング大会における環境負荷センサーの実測データ

今年度前半は旭滝や八丁池などのジオサイトにセンサーを実際に設置し、自然の条件下で試行を繰り返して、上記の課題の克服に挑む予定である。

課題克服にめどが立ち次第、センサーを複製・調整し、他のジオサイトへの設置個所を増やしていき、訪問者による環境負荷の実態把握や鳥獣害対策に応用していくことが目標である。

ジオパークガイドと連携して開発する伊豆半島ジオパーク教育プログラム

メンバー ※学年は平成29年度
 (地域共生) 1年 矢ヶ部五朗
 (アート&マネジメント) 1年 森本和花
 (スポーツプロモーション) 1年 岡部由佳、西郷慶亮、鈴木麻央
 指導教員：○教授 小山真人、特任准教授 山本隆太
 ※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
 伊豆半島ジオパーク推進協議会

伊豆半島ジオパークは、2018年4月17日にユネスコ世界ジオパークに認定され、ますます注目度が上がっています。しかし、ジオってなんだ？ジオパークってなに？と思う人も多いはず。

私たちのフィールドワークでは、ジオパーク推進協議会やジオガイド協会と協力し、ジオパーク内の資源を活かして地域振興を深めるための活動を行っています。

また学校教育との連携として、2022年から高校で必修化される「地理総合」でジオパークを活用するため、ジオパーク教育プログラムの提案を行っています。



伊豆半島ジオパーク
 IZU PENINSULA GEOPARK

ジオパークが少しでも気になった方は
 ぜひ伊豆半島ジオパークを訪れてみてください！

取り組んだこと

第1回2017/10/21(土)~22(日)

- ジオサイト見学
 伊豆半島ジオパークの拠点となるジオリアを中心いくつかのジオサイトを見学し、そもそもジオパークとは何なのか？伊豆半島ジオパークの特徴を学んだ。

第2回2017/11/11(土)~12(日)

- ガイドさんへのインタビュー
 第1回のフィールドワークの後にアンケートを作成し、事前に回答をいただいた(図1)。また、2日間で計4人のジオガイドさんにインタビューを行った。
- 教材研究
 他のジオパークのパンフレットと比較したり、ジオリア内の展示物をグループ化したりすることで伊豆半島ジオパークの課題を発見し、解決のための教材をどう作るかを話し合った。

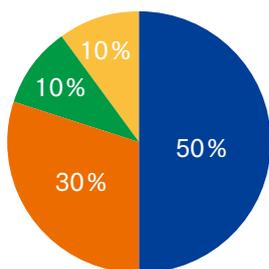
第3回2017/12/16(土)~17(日)

- ジオサイト見学
 実際にジオガイドさんとジオサイトを回った。第1回で見学したところと同じジオサイトを回ってもらい、どのようにガイドしているのか調査した。
- ワークショップ開催
 ジオガイドさん8人に対して第2回までのフィールドワークで自分たちが感じたことや発見した課題を発表するとともに、みんなで未来の伊豆半島ジオパークをどうしたいかを話し合った。

第4回2018/3/10(土)

- 大学SDGs ACTION! AWARDSに参加
 SDGsの目標達成へ向けて活動する他大学の学生らや先進企業の方たちの取り組みを聞いた、今後どうしていくべきか意見を交わした。

小中学生に「ジオストーリー」や「ジオ・エコ・ひと」といった考え方や捉え方について、説明することはありますか？



- ジオストーリーも、ジオ・エコ・ひとも使ったことがある
- ジオストーリーはあるが、ジオ・エコ・ひとはない
- ジオストーリーはないが、ジオ・エコ・ひとはある
- ジオストーリーも、ジオ・エコ・ひともない



↑第2回フィールドワークにて教材研究で火山の噴火実験をしている様子



↑第3回フィールドワークにて行われたワークショップの様子

図1 ガイドアンケート結果

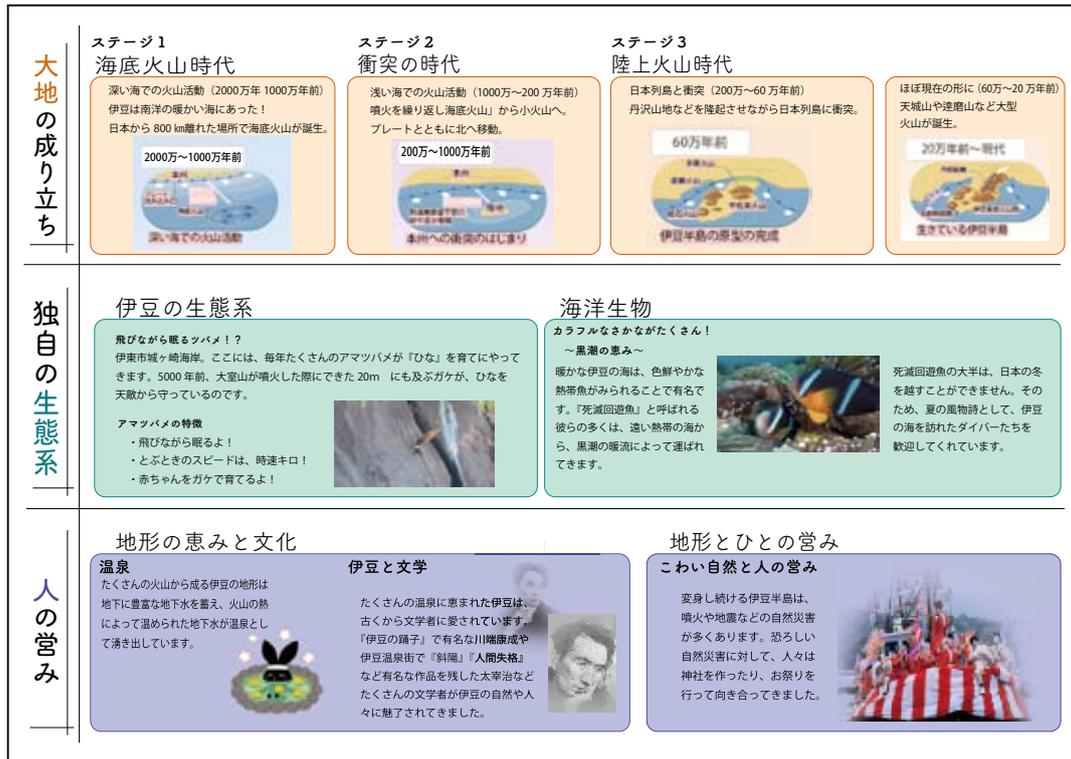


図2 開発中のパンフレット（制作中）両面印刷で三つ折り

発見した課題

1. エコの扱いが難しく、ジオ要素が強い

- ・岩石などは比較的容易に展示できる一方、ジオリア内で動物を飼うのは管理が難しい。
- ・野外で生き物の説明をしたくても外で確実にそこにいるとは限らない。

2. 地域住民との連携

- ・修善寺には拠点施設である「ジオリア」があるが、現地ではまだ知らない商店もあった。
- ・ジオパークの会議はジオガイド協会や推進協議会、また興味のある人で行われ、地域住民を十分に巻き込めていない。

3. 地域格差

- ・ジオリアがある伊豆市や周辺にはジオパークの看板があり、ビジターセンターのスペースが広い。
- ・ジオサイトでもジオパークの説明をする看板がなかったり、道路が舗装されていなかったりしている場所もある。

4. 教育教材について

- ・ジオパークに関する出版物は出ているものの、専門性が高いものが多いように感じる。
- ・出版物に限らず、実験道具やパンフレットなどいろいろなアイデアを出して教材開発をしていくべき。

5. 切り口の少なさ

- ・ジオツーリズムを進めるにあたり、一般の人々に、ジオ以外の要素からどのようにして興味をもってもらうか。
- ・多くの切り口が必要である。ジオ菓子は有効な切り口の1つである。

今後取り組むべきこと

教材づくり

- ・ジオ・エコ・ひとを同等に扱ったパンフレットを製作中(図2)。加えて、ARなどを組み合わせた教材を開発していく。

ジオガイド協会、推進協議会との協力

- ・イベントの手伝いの依頼が数多くあったが、こちらの事情であまり手伝えなかった。予定を合わせ協力していきたい。

関係者以外の地元住民と関わる

- ・昨年は「よそ者」としてアプローチした。今年は、地元住民はどう感じているのか、調査するとともに協力をしたい。

まだ訪れていない地域を訪れる

- ・15市町と広いため、まだまだ回りきれしていない。

世界ジオパークとして

- ・世界ジオパークに認定され、観光客の増加のみならず、リピーター獲得のためにも魅力をどう伝えるか工夫する。

県営住宅団地における居場所づくりと地域福祉資源のネットワーキング

メンバー ※学年は平成29年度
(地域環境・防災) 1年 遠藤爽、河村拓斗、櫻木哲朗
(アート&マネジメント) 1年 浦田紗季
指導教員：○准教授 山本崇記、准教授 祝原豊
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
社会福祉法人静岡県社会福祉協議会

地域の概要



七尾団地

団地とは、住宅を1ヶ所に集中させて建設された地区のことであり、県営団地とは、県が運営している、公営団地のことである。県営団地には、入居のための条件があり、同居親族がいることや、一定の収入額などが該当する。しかし現在は、高齢者の一人暮らしなどを受け入れている。今日、高齢者の孤独死が問題に挙げられており、一部の県営団地では、その対応策が実施されている。

静岡県の県営団地においても、孤独死や買い物難民などの高齢化に伴う諸問題が発生している。

取り組んだこと

県営団地フィールドワークは平成29年度より始まったため、県営団地の現状把握をするための聞き取り調査を中心に行った。詳細は下記の通り。



食事会の様子

第1回目（2017年10月21～22日） 先進地視察／七尾団地（熱海）

先進事例の1つである。1日目は、団地の会長さんが孤独死対策のために力を入れている「居場所」についてお話を伺った。2日目は、「居場所」づくりの一環として行われている食事会に参加し、住人の方々に団地について聞き取りをした。

第2回目（2017年12月23～24日） 先進地視察／原団地（沼津）

こちらも先進事例の1つである。1日目は、力を入れているイベントについてお話を伺った。2日目は、大きなイベントの一つである餅つき大会に参加し、住人の方々と交流したり、子どもたちとふれあったりした。



餅つき大会の様子

第3回目（2018年2月19日）吉川団地（静岡市清水区）

まず、集会所で行われていた静岡市版介護予防体操のでん伝体操に参加した。その後、団地の現状や問題についてお話を伺った。

防災事情

七尾団地

ローリングストック法による備蓄がなされている。毎年300食購入し、常時1000食ほど備えている。

原団地

貯水量170tのタンクがあり、1週間分の水を確保できる。油火災など日常生活で起きうる災害を対象とした防災訓練を実施している。



七尾団地の備蓄

吉川団地

12月に防災訓練を行っているが高齢者が増え、参加できない人が増えてきている。

解決すべき課題

• 団地内の高齢化と、それに付随する入居者の不足

団地の設立当時に若い世代であった入居者の時代経過による高齢化、若い世代の団地離れにより、県営団地では深刻な高齢化・入居者不足が発生している。背景には若者が入居しにくい行政レベルの制度の存在がある

• 高齢化に伴う孤独死

高齢化に伴い高齢者の独居世帯も増加している現状下では、孤独死の発生が懸念される。孤独死を防ぐ取り組みとしては七尾団地のような「居場所」の取り組みがある。

• 「居場所」づくり活動への参加者数の拡大

「居場所」づくり活動は孤独死を防ぐ活動として適しているが、中には「居場所」に来ることをためらう入居者もいる。よって、そのような方にかんして参加して頂くかが課題となる。

• 隠れた子ども達の存在

孤独死を防ぐ「居場所」づくりの活動等に目が行きがちだが、団地内には人数が少ないゆえに寂しい思いをしている子ども達もいる。そういった子ども達の「居場所」づくりも考えなければならない。

今後取り組むべきこと

• 居場所づくり

現在、居場所づくりにかかわっている各市の社会福祉協議会や民生委員、包括支援センターと学生がどのようにかかわっていけるか考える。また、高齢者向けの居場所のみならず、子供向けの居場所も考える。

• 近隣の学校との交流のきっかけづくり

若者との交流が必要とされているため、団地の周辺小中学校、高校の児童、生徒と交流の場が作れないか考察する。

新聞に見る地域創造学環フィールドワーク

平成29年度 静岡大学地域創造学環のフィールドワークはさまざまな新聞で取り上げていただきました。

■平成29年度 新聞掲載記事一覧

| 掲載日 | 新聞社名 | 記事タイトル | 関連フィールドワーク |
|-------------|--------|---|------------------------------------|
| 平成29年4月5日 | 静岡新聞朝刊 | 静大生、松崎でワークショップ 「防災意識向上に」 | 松崎町 観光と防災 |
| 平成29年5月21日 | 静岡新聞朝刊 | 清水区まちづくり 学生と連携 活性化策など報告 自治会連合会 | 静岡市 清水港周辺地域 |
| 平成29年5月30日 | 静岡新聞朝刊 | 地域課題解決へ現地調査を報告 静大地域創造学環 | 平成28年度フィールドワーク報告会 |
| 平成29年5月31日 | 静岡新聞朝刊 | 黒潮 清水区まちづくり協働会議 学生の力 活性化へ期待 | 静岡市 清水港周辺地域 |
| 平成29年7月19日 | 毎日新聞朝刊 | 静岡大・地域創造学環が2年目 フィールドワーク本格化 地域住民と連携し課題解決に挑戦 | 全体 静岡市 浅間通り商店街 |
| 平成29年8月12日 | 静岡新聞朝刊 | 伊豆の課題を考える 静岡大などフォーラム 南伊豆 | 松崎町 商店街 松崎町 観光と防災 |
| 平成29年8月30日 | 静岡新聞朝刊 | 「出会いの場、もっと」「大学連合」で意気投合 地元学生、静岡市長と「トーク」 | 地域創造学環学生 |
| 平成29年10月22日 | 朝日新聞朝刊 | ハロウィーン準備 静大生が先生役に | 静岡市 清水港周辺地域 |
| 平成29年10月24日 | 熱海新聞朝刊 | 絆強化へ食事会 中学生一高齢者70人参加一熱海七尾団地町内会 | 県営団地 |
| 平成29年11月9日 | 中日新聞朝刊 | ある日、息子が俳人に 浜松文芸館PRへ 静大生 認知度向上コピー | 浜松市 浜松文芸館 (公益財団法人 浜松市文化振興財団) |
| 平成30年1月21日 | 静岡新聞朝刊 | 東伊豆 静大生ら「インスタ映え」発信 | 東伊豆町 |
| 平成30年1月30日 | 静岡新聞朝刊 | 清水寄港の外国人に 静岡大生が案内パネル 英語と中国語 港周辺 や店舗に提供 | 静岡市 清水港周辺地域 |
| 平成30年1月31日 | 中日新聞朝刊 | 中国語と英語で観光マナー紹介 静大生がパネル作製 | 静岡市 清水港周辺地域 |
| 平成30年2月15日 | 静岡新聞朝刊 | 静大生、松崎高生と交流 ワークショップ 町の課題、進路議論 | 松崎町 商店街 |
| 平成30年3月10日 | 静岡新聞朝刊 | 静大生が清水港散策マップ 外国人観光客に配布 英語版一万部 自治会、市と連携 | 静岡市 清水港周辺地域 |

ここでは掲載いただいた記事のうち一部をご紹介します。

平成29年10月24日熱海新聞朝刊

七尾団地町内会

絆強化へ食事会開催

中学生―高齢者70人参加

熱海市伊豆山の七尾団地町内会（大友勇会長）は本年度、新たな事業として「食事会」を開いている。手作り料理を旨と食べること、「偏食」や「孤食」を防ぎ、地域の絆を強めるのが狙い。22日に同団地集会所で開いた2回目の食事会には、中学生から高齢者まで幅広い世代の住民と、調査研究で訪れた静岡大の学生ら約70人が参加し、和気あいあいと「皆（かい）食」を楽しんだ。



和やかに「皆食」を楽しむ七尾団地町内会の住民たち
＝伊豆山の県営七尾団地集会所

住民の高齢化率が高の実態を計画した。県
い現状を踏まえ、町内による集会所調理場の
会の事業として年3回改修（増築）が活動

集まった住民が大友
たと思いを話した。

後押しした。
調理係の役員ら
が持ち回りで担当す
る。今回はきのこの炊
き込みご飯、具だくさ
んみそ汁、小松菜のこ
まあえを用意した。集
会所が停電するアクシ
デントがあったが協力
して調理、配膳した。

静岡大生、調査研究で参加

食事にには静岡大地
域創造学環と県営団地
での居場所づくりの調
査研究に取り組み1年
生4人が、担当の准教
授らと共に参加した。
県内でも先進事例とさ
れる同町内会の常設型
調理室を視察し、大友
会長の話を聞き、取り
組みが強制的ではない
から、住民が主体的に
地域の情報を寄せたり
するのだった。皆
さんが自発的だと思っ

平成29年11月9日中日新聞朝刊

中日新聞

(第3種郵便物認可)

地元の写真作家ゆかりの品を紹介する浜松文芸館（浜松市中区）の認知度を高めようと、静岡大地域創造学環（静岡市駿河区）の学生が、ポスターやチラシ用のキャッチコピーを編み出した。鑑賞した若者が俳句に興味を持つ趣向の、「ある日、息子が俳人になって帰ってきた。」。撮影や編集も手がけ、若者の来館を促している。（松本浩司）



完成したポスターなどを手にする学生たち＝浜松市中区の浜松文芸館で

ある日、息子が俳人に...

浜松文芸館PRへ

静大生 認知度向上コピー

春に現在のクリエイターとつた同大の事務員を
浜松に移転したが、ク 転用し、学内の和室で
リエイト来館者へのア 撮影。コピーと写真を
ンケートでは、存在や レイアウトした。
展示内容を知らない声 浜松の活性化に興味
もあり、学生らは認知 のあった松本さんは
度の低さを痛感した。「大きな経験になっ
最も骨が折れたとい た。周りの多くの学生
らコピー作りでは、全 の意見を聞いたのが役
体で五十一、六はどの に立った」と話す。
案が集まり、意見を出 同館は県西部の高校
し合った。若者ら鑑記 させる「息子」という ターとチラシを配布。
言葉を使い、俳句の世 一八年度には若者向け
界に夢中になるイメー 講座を開くなど、若者
ジを表現した。 モデルには箱物をま 続ける。

稲取で探す「インスタ映え」

静岡大生らコンテスト

静岡大と東伊豆町のNPO法人ローカルデザインネットワークは20日、同町稲取地区で大学生による写真コンテストを開いた。県内の大学生18人が写真共有アプリ「インスタグラム」に投稿し、伊豆半島東海岸の港町の魅力を発信した。

（下田支局・杉山諭）

少子化と人口減少に直面する町に若者呼び込むきっかけにしようと、「地域づくり」をテーマに町内でフィールドワークに取り組み静岡大の1年生4人が企画。参加した学生はカメラ

港町の魅力投稿

やスマートフォンを手に、風光明媚（めいび）な稲取地区を散策した。写真のテーマは「ハート型」。ハートの模様に見える

るマンホールやタイル、ハートをデザインしたコーヒの容器などを観と組み合わせて撮影した。稲取地区では同日から「雛（ひな）

のつるし飾りまつり」が開かれ、スタンラリーにも参加した。静岡大の4人は2018年度以降もフィールドワークを続けるという。池田橋平さん19は「若い人向けのイベントを充実させた」と抱負を話した。



港町を散策し、インスタグラムに投稿する写真を撮影する大学生＝東伊豆町

清水寄港の外国人に

静岡大生が案内パネル

清水港船宿記念館「末廣」の職員（左）に作成したパネルの説明をする静岡大の学生＝静岡市清水区



清水港に寄港する外国客船の乗船客にまち歩きをしてみよう、静岡大地域創造学環の学生11人が28日、施設紹介などが英語と中国語で書かれたポップパネルを静岡市清水区の港周辺施設や店舗計27カ所に提供した。（清水支局・内田圭美）

英語と中国語 港周辺や店舗に提供

自治会と区役所、学生が連携して地域課題解決を目指す「清水区まちづくり協働会議」の取り組みの一つ。学生は浜田、清水両地区の連合自治会の案内で街歩きをし、外国人に立ち寄ってほしい施設をピックアップ。各店舗で外国人に伝えたいことや困っていることを聞き取り調査してパネルを作成した。学生らは同日、27カ所を訪問し、それぞれのパネルの内容を説明した。同区港町の清水港船宿記念館「末廣」では「触らないで」「カードは使えません」など注意事項を明記したパネルを手渡した。寺には寺の紹介、飲食店にはメニュー紹介など、各施設や店舗で必要とされる内容をイラスト入りで配した。静岡大2年の本田圭美さん20は「日本を好きになってほしいので、ただ注意を促すだけでなく、イラストや色で日本らしさを表現した」と語った。

平成29年度 静岡大学 地域創造学環 フィールドワーク報告会

日時 平成30年5月31日(木) 10:00~15:30

場所 静岡県男女共同参画センター あざれあ6階 大ホール

【実行委員】

アート&マネジメントコース3年 井口 紗那、大澤 七彩
2年 浦田 紗季、樋口 加奈

【司会進行】

地域経営コース2年 池田 橘平、地域共生コース2年 望月 南緒
地域環境・防災コース2年 大橋 和真、アート&マネジメントコース2年 樋口 加奈
スポーツプロモーションコース2年 野村 圭生

【報告会リーフレット、報告書表紙デザイン】

アート&マネジメントコース2年 梅田 留奈

※学年は開催時(平成30年度)

平成29年度 静岡大学 地域創造学環 フィールドワーク報告書

平成30年5月31日発行

編集発行 静岡大学 地域創造学環
